

最後の巻頭言 1
学会等参加報告 3

NEAR短信 5
NEARセンター市民研究員の活動一覧 6

最後の巻頭言

NEAR センター長
李 曉東

浜田市には日本遺産に認定されている港「外ノ浦（とのうら）」がある。ここは江戸時代から北前船の寄港地として栄えた。美しい松原湾の入り江を見守るように、岸に一つの石碑が佇んでいる。元内閣総理大臣岡田啓介の揮毫による「會津屋八右衛門氏頌徳碑」（正しくは今津屋八右衛門）である。

今津屋八右衛門（1789-1837）は江戸時代の廻船問屋で、浜田藩の御用商人であった。藩財政が厳しい中で、八右衛門は時の藩主松平康任の黙認により、島根半島、隠岐を經由して竹嶋（現在の鬱陵島）に渡り、朝鮮と密貿易を行った。密貿易は朝鮮に止まらず、東南アジアまで展開されていたとも言われている。海外との貿易は浜田藩に大きな利益をもたらし、藩の財政状況を大きく改善した。ところが、鎖国に抵触するような脱藩行為が幕府に許されるはずがなく、やがて幕府に渡海が発覚した八右衛門は処刑された。天保年間のいわゆる「竹嶋事件」である。

藩の財政を立て直すために、年貢の徴収を増やし、または藩士の俸禄を削るのではなく、海外貿易を通して財を増やしていく。そのことを死罪を覚悟するまで敢行したのは、八右衛門たちの生のための工夫であった。それは八右衛門が地元の人々に慕われてきた理由ではないか。同じ島根県であっても、浜田には宍道湖がない。たたら製鉄も、出雲大社もない。石見の人々は海に大きく頼りながら生きてきた。そのために、海、そして海の向こうに目

を向けて、日本海、北東アジアを自分たちの生活圏として考えるのが石見の人々の自然な生き方であったし、今もそうである。

島根県立大学は地域創生の一環として、2000年に八右衛門を生み出した浜田の方々に温かく迎え入れられて建学した。建学とともに、北東アジア地域研究（NEAR）センターが大学の付置研究所として設置された。大学のカラーを鮮明にすべく、初代学長宇野重昭先生は「北東アジア学の創成」を掲げて邁進した。NEARセンターはこの理念を遂行する担い手であり続けてきた。「北東アジア」は本大学の研究の特色を示すものと共に、地域創生につながるものでもあるのである。

2023年3月末で、大学組織改編により、NEARセンターは廃止される。

これまでの23年間を振り返れば、NEARセンターは日本が北東アジア諸国との間に領土問題や歴史認識問題を抱えている現状に目をそらすことなく、問題を抱えているからこそ、研究を通して他者と真摯に向き合い議論をかわすべきだとの姿勢で、北東アジアの人々との相互理解の増進に努めてきた。

この23年の間に、NEARセンターは積極的に北東アジア諸地域の研究機関と研究交流を行ってきた。北京大学国際関係学院、復旦大学国際問題研究院、中国社会科学院日本研究所、東北師範大学東亜文明研究院、ソウル大学東北アジア研究所、啓明大学、タタールスタン科学アカデミー等々の研究機関と盛ん

学会等参加報告

「2022年度西周研究会活動

——第19回西周シンポジウム」

NEAR 副センター長 石田 徹

西周研究会は2002年度に組織され、2004年度までに7回の研究会を行い、その成果は2005年に『西周と日本の近代』（ぺりかん社）としてまとめられた。NEARセンターもその都度西周研究会と連携を図り協力してきたが、2015年度からは西周研究会活動もNEARセンターの事業の一つとして取り組んできた。西周シンポジウムは2020年度にコロナ禍のためシンポジウム開催中止となってしまったが、2003年度から毎年津和野町で開催され続けてきた。こうした取り組みも、NEARセンターの廃止に伴い、終止符が打たれる。

最後の西周シンポジウム（第19回）は、2022年11月12日、汗ばむほどの小春日和のなか、津和野藩校養老館において、「西周シンポジウム～20年を振り返って」と題し、下森博之津和野町長のご参加のもと、久々の対面で開催された。第1部では西周シンポジウムに長く携わってこられた高坂史朗大阪市立大名誉教授、山岡浩二西周顕彰事業事務局・郷土史家、菅原光専修大教授、村井洋島根県立大学名誉教授（報告順）の各氏による総括報告を、第2部ではそれを承けての宮田健一津和野町教育委員会次長補佐、播本崇史島根県立大学准教授、李曉東NEARセンター長による応答（応答順）、さらに第3部で参加者も交えての自由討論を行った。報告者を除く参加者は、県外大学院生や西周研究者も含めて26名だった。

紙幅の都合上、各氏の報告・応答内容や、白熱した討論内容を細かに挙げることはできないが、西周研究会・西周シンポジウムが、西周研究の歴史において一つの時代を確かに創りあげ、研究の推進はもちろん、若手の育成にも少なくない貢献をしてきたことが改めて確認され、さらに、ドイツ文学資料館を参考にした、教育・観光の拠点としての「思想資料館」構想も紹介された。

自由討論では、西周研究会の今後のあり方についても、報告者、フロア間で活発なやりとりが重ねられ、播本氏からは、コロナ禍の「置き土産」とも言える「オンライン開催」のノウハウを活用してより多くの参加（とくに学生や生徒）を得られるような取り組みについての問題提起があった。

また、宮田氏から津、和野町の取り組みとして2021年に岡山県津、山市、大分県中津、市と「蘭学・洋学三津同盟」を締結し、三市町の交流・振興のための連携・協力体制を築き、2023年度には「三津同盟」での企画も計画されているとの紹介もあった。西周研究会でも2011年度に、「思想家を地域の宝に」と題して津山市と中津市からパネラーをお招きしてパネルディスカッションを行ったことがある（第9回シンポジウム）。筆者はその辺の経緯を存じ上げないので誤解があれば平にご容赦を願うばかりだが、もしこのパネルディスカッションが何らかのきっかけとなって三津同盟につながっていたのだとしたら、西周研究会としては光栄なことだし、逆に初めから三津のつながりがあって西周シンポに至ったのであれば、今更ながら大変ありがたいことだったとお礼を申し上げる次第である。関連して、西周は維新後徳川家が転封された静岡藩の沼津兵学校（@沼津市）の初代頭取（校長）だったこともあるので、「西を縁に三津同盟を四津同盟に拡大できますね」とは、対面開催ならではの休憩時間のおしゃべりでの一幕である。

久々の対面による討論は、改めて「対面でのつながり」の大切さと楽しさを参加者に思い知らせてくれたように思う。そうした参加者の中にはNEARセンターの廃止に驚き、絶



句する方も少なくなかった。たかが20年かもしれないが、されど20年でもある。総括報告から自由討論で繰り広げられた議論に、その20年の重みを痛感させられた。

末筆ながらこの場を借りて、この20年間、西周研究会・西周シンポジウムに惜しみない協力をしてくださった津和野町の皆さまに心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

2022年度第2回北東アジア研究会

第1部 研究報告：岡本隆司（京都府立大学）

「二つの『中国』・琉球『両属』の研究」

第2部 『論集 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響』合評会

NEAR副センター長 石田 徹

2001年度から始まった北東アジア研究会の最後となる2022年度下半期、北東アジア研究会は2回のやや大きな研究会を企画した。1つは2月14日に開催した第2回北東アジア研究会で、午前・午後に分けた大がかりなものであり、もう1つは3月11日にNEARセンターファイナルシンポジウムとしても開催する第3回北東アジア研究会である。後者は原稿執筆時点で「未来」のことなのだが、開催後に報告する場もないので、ここに併せて記す次第である。読者諸賢のご海容を乞うばかりである。

今年度第2回北東アジア研究会では、午前には岡本隆司京都府立大学教授をお招きして「二つの『中国』・琉球『両属』の研究」という相互に関わりのある2つのテーマについてご報告いただいた。ともに未定稿の報告なので詳細は控えるが、前者は「中国」概念と“china”概念の内実についての考察で、後者は一般に琉球は日清「両属」と理解されていたが、その「両属」概念についての詳細な分析である。報告後はフロアとの間で質疑応答を行った。

次いで午後は、昨年度末（2022年3月）に刊行された、NEARセンターが進めてきた人間文化研究機構北東アジア研究プロジェクトの最終成果である『論集 北東アジアにおける近代的空間の形成：その形成と影響』（以下『論集』）の書評会を行った。午前に引き続き岡本氏と、青木雅浩東京外国語大学准教授に評者

をお願いした。岡本氏からは『論集』の漢語圏を扱った論文を中心に本書全体についての批評をいただいた。本書では「コンタクト・ゾーン」という概念を用いて北東アジアにおける近代的空間を論じたわけだが、「直接『コンタクト』する局面をあつかう論考が乏しいのでは？」との急所を衝く指摘があった。

また、青木氏からは、具体的な20世紀前期のモンゴル社会の史料に即しながら『論集』が論じた「近代的空間の形成」は、「20世紀のモンゴル人社会は、今まで存在しなかった要素にさらされ、社会のあり方の変更を余儀なくされる状況に置かれていた」という点を的確に捉えたものであるとの評を受けた。その後、休憩を挟んで、執筆者の応答と自由討論となったが、議論は多岐にわたり、紙幅の都合上、ここでは細かに紹介できない。重ねてご寛恕を乞う次第である。

なお、第3回北東アジア研究会は、一昨年度、第4巻と第5巻の刊行を以て完結した「北東アジア学創成シリーズ」について、第4巻『ロシア社会の体制転換—階層構造の変化に着目して』の著者林裕明立命館大学教授と第5巻『現代中国の社会ガバナンス—政治統合の社会的基盤をめぐって』の著者江口伸吾南山大学教授をオンライン／オフラインでお招きして自著を語っていただく第1部と、「北東アジア学の創成—回顧と展望」と題して、これまでNEARセンターに関わってきた研究員・職員などでNEARセンターの23年を語り合う第2部とで構成され、3月11日に交流センター・コンベンションホールで行う予定である。第2回北東アジア研究会とあわせて北東アジア研究会活動の有終の美となることを祈念して擱筆する。

中日国交正常化50周年記念

国際学術シンポジウム

「大都市のガバナンスと参加」

NEARセンター研究員 中村 圭

2022年11月1日、中国社会科学院社会学研究所、中国社会科学院上海市人民政府上海研究院、中国社会学会中日社会学専門委員会主催にて、中日国交正常化50周年記念国際学術シンポジウム「大都市のガバナンスと参加」が開催

された。今回のシンポジウムは中国と日本の比較視点に基づき、国際化大都市建設におけるソフトパワー、文化、生活様式などの問題に焦点を当て、定性的、定量的な社会学、人類学の研究を通じて中日間対話を展開することを試みたものである。シンポジウムは中国上海研究院とオンラインで繋がれ、同時進行方式で実施され、日中両国から多くの研究者が参加した。

開会式の挨拶では、李培林（全国人民代表大会常務委員、中国社会科学院学術部）により中日の社会学・人類学界は、費孝通、中根千枝によって緊密な交流の歴史が始まって以来、密接な交流を保ってきており、今年は中日国交正常化50周年であり、日中の社会学界の緊密な交流は、日中文化交流の好事例となっていることに言及した。

基調講演として町村敬志（一橋大学、日本社会学学会前会長）、「転換期における日本都市社会の課題—人口減少へどう対応するか—」、陳映芳（上海交通大学教授）「都市開発中の“地方”—以上海の“江南”為例」、佐藤嘉倫（東北大学教授）「Social Capital in the Creation of Governance, Participation, and Inequality in Big Cities」、李国慶（中央民族大学教授）「東京圏多中心結構及其对京津冀發展的啓示」が行われた。

午後からは9つのフォーラム「日中農村振興の理論と実践」「日中科学技術と社会学」「都市基層社会イノベーションの日中比較」「日中地域社会研究」「ケアと家族愛」「日中両国の家庭とジェンダー」「日本の新華僑華人の社会史」「グローバル化における相互作用と融合」「高齢化とエイジフレンドリーな都市の構築」に分かれ計53名の研究者による報告が行われた。

筆者は「日中地域社会研究」部会に参加、「コロナ禍における都市祭礼の開催と復興「神話」の構築—令和四年京都祇園祭山鉾行事を事例として—」を報告した。当該部会には日本から3名の研究者が参加し、コロナ禍で日本でのフィールドワークが中断している中国在住の研究者による報告のコメンテーターを務めた。

閉会式では、陳嬰嬰（中国社会科学院社会学研究所）によって、中国と日本の社会学者の交流の歴史について写真を共有しながら回顧した。1980年代、中国社会学の復興の初期に中国は国際社会学会から多くの支援を受け

たこと、特に日本社会学会からの支援と援助は忘れてはならないものであったことを語られ、次世代へ日中交流の歴史を引き継ぐ象徴的な時間となった。

政治的な緊張から日本においては各方面の中日国交正常化50周年記念の行事の開催に影響が及び、かつコロナ禍でいまだ直接の学术交流が叶わない状況下、日中双方の社会学界の学术交流の1ページを刻んだ記念すべきシンポジウムとなった。

NEAR 短信 (2022年9月～2023年3月)

研究会活動

- 第62回日韓・日朝交流史研究会
【日時】2022年12月1日(木)15:00～16:30
【場所】講義研究棟 大演習室1
【内容】八田靖史（コリアン・フード・コムニスト）「『韓国ドラマ食堂』の話」
- 第63回日韓・日朝交流史研究会
【日時】2023年1月19日(木)15:00～16:30
【場所】講義研究棟 会議室B
【内容】金暎根（韓国高麗大学校グローバル日本研究院教授）「尹錫悦政権の対北（朝鮮）安全保障政策：相互主義と拡大核抑止戦略を中心に」
- 2022年度第2回北東アジア研究会
【日時】2023年2月14日(火)9:30～17:30
【場所】講義研究棟 大演習室1
【内容】第1部 研究報告：岡本隆司（京都府立大学）「二つの『中国』・『琉球』『両属』の研究」／第2部『論集 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響』合評会：岡本隆司報告／青木雅浩（東京外国語大学）報告／執筆者コメント：岡洋樹（東北大学）、柳澤明（早稲田大学）、森永貴子（立命館大学・オンライン）、石田徹、井上治、山本健三、李正吉、李暎東／総合討論
- 2022年度第3回北東アジア研究会
【日時】2023年3月11日(土)13:00～17:00

【場所】コンベンションホール(オンライン同時開催)
 【内容】一「北東アジア学創成シリーズ」(国際書院)自著報告会:第4巻 林裕明『ロシア社会の体制転換——階層構造の変化に着目して』/第5巻 江口伸吾『現代中国の社会ガバナンス——政治統合の社会的基盤をめぐって』/二 座談「北東アジア学の創成——回顧と展望」:①福原裕二「NEARセンター23年の歩み」/②「回顧と展望」:中島哲(元事務局長)、今岡充(元総務課長)、石井彰(国際書院社長)、飯田泰三(名誉研究員)、元助手、元研究員、研究員など



NEARセンター市民研究員の活動一覧

○第2回市民研究員研究会

【日時】2022年12月3日(土)13:00~16:00
 【場所】講義研究棟 中講義室3
 【内容】挨拶/NEAR アカデミック・サロン:山本健三研究員「ミハイル・バクニンとウクライナ問題」/「大学院生と市民研究員の共同研究」中間報告:胡磊(大学院生)・山崎京二(市民研究員)・坂東朋子(市民研究員)「中朝「特殊関係」の変容と実態——中国(『環球時報』)の対北朝鮮報道の内容変化と日本(『朝日新聞』)の対北朝鮮報道との差異にみる中国の対北姿勢・認識の考察」/市民研究員による研究報告:岡崎秀紀「Mr. James による蓮如上人「白骨の御文」の英訳について——『梵学』第6号(明治25~30年)掲載の能海の筆写から——」/

牛尾昭「形骸化した一部事務組合の改革」

○第2回市民研究員全体会

【日時】2023年1月21日(土)13:00~15:00
 【場所】講義研究棟 中講義室3
 【内容】挨拶/市民研究員による研究報告:高橋優子「朝鮮半島出身被爆者のための二つの碑 ~長崎」/田中文也「記紀神話の復元の出版報告」

○第3回市民研究員全体会

【日時】2023年3月4日(土)13:00~15:30
 【場所】講義研究棟 中講義室3
 【内容】挨拶/市民研究員制度の今後について/NEAR アカデミック・サロン:福原裕二研究員「メタ・フィクション国家=北朝鮮の動向——近著(福原裕二・吉村慎太郎著『北朝鮮とイラン』集英社新書、2022年)の紹介を中心に」/市民研究員と大学院生の共同研究成果報告:胡磊(大学院生)・山崎京二(市民研究員)・坂東朋子(市民研究員)「中朝「特殊関係」の変容と実態——中国(『環球時報』)の対北朝鮮報道の内容変化と日本(『朝日新聞』)の対北朝鮮報道との差異にみる中国の対北姿勢・認識の考察」/市民研究員による研究報告:福原彬文「近世の東アジアにおける離婚について——江戸時代、明・清時代及び朝鮮王朝時代における離婚の調査概要——」



NEAR News 第63号(最終号)

2023年3月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail:near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ:<https://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/>